

2012年度『蔵前ベンチャー賞』・『蔵前特別賞』 授与式・受賞者記念講演会

蔵前工業会はベンチャーの育成を目的に、2007年度から『蔵前ベンチャー賞』を設置しました。

「蔵前ベンチャー賞」の目的は「高い経営理念を持って、新しい技術、サービス、製品、ビジネスモデル等を事業化することにより、新しい市場や雇用を創造した企業を表彰することにあります。

また2009年度から『蔵前特別賞』を設置し、産業界または社会に顕著に貢献した個人および企業を表彰しています。



『蔵前ベンチャー賞』・『蔵前特別賞』授与式、記念講演会

2012年11月26日（月） 東工大蔵前会館くらまえホールで行われました。[参加者176名（内学生44名）]

2012年度蔵前ベンチャー賞	受賞理由
(1) タクトシステムズ(株) 1986年創業 社長 滝沢 正隆氏 1965東工大制御卒1967修士	独立系ソフトウェアハウス。業務アプリケーションソフトの開発やクラウド型システム技術コンサルタント業務を展開。データベースの構築・活用に豊富な経験と優位性を有する。
(2) ㈱ワック 1996年創業 社長 栗橋 寿氏 1983東工大社工卒	商業施設向けキッズイベントの企画・運営受託及び直営ロケーションを展開。独創的な企画力と機器自製化の強みを活かし、ユニークなアイデアを事業に実現させた。
2012年度蔵前特別賞	受賞理由
(1) ㈱日建設計 (東京スカイツリーの設計、技術に 対して) 代表者 社長 岡本 慶一氏 1970東工大建築卒	2012年開業の東京スカイツリーは最新の技術を駆使して実現した日本活性化のシンボリックな存在である。これは㈱日建設計の独創的で優れた設計と革新的な技術の成果である。 ・足元の平面形状は構造上有利な三角形、上層部は円形になるように徐々に変化するオリジナリティーのある形態。 デザイン的に日本の伝統的なシルエットを与えた。 ・「心柱制振」という世界初の制振システムを開発した。
(2) 原 信太郎氏 (原鉄道模型博物館に対して) 1919年生まれ1942東工大機械卒 コクヨ(株)専務を経て(財)原総合知的通信 システム基金を設立	原氏が長年をかけて製作・所有している鉄道模型を一般公開する「原鉄道模型博物館」を2012年7月横浜に開館。 同氏の精緻・精巧な鉄道模型は実物の鉄道技術を模型に搭載・再現したものである。人々にものづくりの楽しさを教えると共に産業文化史を物語る貴重なものである。



『蔵前ベンチャー賞』授賞記念講演

タクトシステムズ株式会社 代表取締役社長 滝沢正隆氏

入学から企業就職そして起業

振り返れば本学に制御工学科が創設された初めての応募受験の昭和36年度の学生として入学し、そして電子計算機という言葉で一般のコンピュータ利用が揺籃期にあった頃、社会に出ました。ずっと今日迄コンピュータに関り、企業では19年間、そしてその後45歳の時にソフト会社を起業して4半世紀経過しました。起業するときはいささか遅いなあとと思いつつも少しでも自分に納得の出来ることをやりたいと、そしてそれなりの理想のソフトハウスを創りたいという想いでチャレンジしました。

独立系ソフト会社

「派遣をしない、地に足をつけた仕事をする、常にトップレベルの技術を目指す、技術の中核はデータベース（DB）、そして社員一人ひとりが生甲斐を実現できる会社にする」、それが本もののソフトハウスだという想いのもとにやってきました。まだまだ最終目標には到達していません。現



在130名ほどの会社です。

起業した1980年代は大型機全盛でしたが、私どもはミニコン、ワークステーション等の小型機のプログラム開発を指向してき

ました。当時まだパソコンは実用化には程遠い存在でした。創業して5年目に、DB関連の海外のソフトウェアUnifaceを日本総代理店として扱ったことから、仕事も全国的な事業展開となりました。



この間IT技術の進歩は目ざましく、私どもの対象とする技術も分散型DBから、クライアント・サーバー構築へと変わり、更にネットベースのシステムからクラウド開発へと変遷してきました。

もっと良い会社を目指して現在はWebベースを主体とするプログラムの受託開発とパッケージソフト事業をやっています。ゆくゆくは自社パッケージを中心とするSaaS会社になりたいと思っています。まだ道は半ばですが、創業の初心を忘れず、常に高い技術レベルを目指し、一人ひとりが生甲斐を持つことの出来る更に一段上の会社を目指して頑張ってゆくつもりです。

起業して独立企業を目指すなかでは、家族や多くの友人に支えられてきました。

志とくじけない心、この二つがあれば必ず道は拓けるものと思っています。

独立して起業をする若い同窓生のみなさんが一人でも多く現れることこそ、この国が元気の良い国に再生する大きな力に寄与すると信じています。

Technology and Knowledge for Tomorrow (TaKT) を心に期して。

注）SaaS：Software as a Service（ネットワークを通じて、ユーザにアプリケーションソフトの機能を必要に応じて提供する仕組み）

『蔵前ベンチャー賞』授賞記念講演

「商社マンから移動遊園地屋へ」

株式会社ワック 代表取締役 栗橋 寿氏

現在のビジネス

皆さんこんにちは。昭和58年社会工学科、華

山研究室卒業の栗橋です。ワックという会社はワクワクを提供することを使命としています。ロンドンバスやトーマスの機関車、砂金採り、ボート

や縁日、恐竜、鏡の迷路、スケートリンク、これらを全国あちこちに届ける移動遊園地屋です。すべて常設ではなく、仮設移動型のビジネスで、たぶん、本学卒業生でこういう商売をしている人間は初めてじゃないかと思います。

温かく湿った百円玉

きっかけは、温かく湿った百円玉です。

卒業して商社に勤めましたが、社内ベンチャーで遊園地設備を手掛けることになり、運営現場で、体験したことです。寒い日のことで、順番待ちをした子供たちが次々に渡してくれたのが、手のぬくみで温められた、あったかい百円玉です。背筋に電流が走りました。「これは、なんだ。なんなんだ」という感覚です。

何のために仕事をするのか、大きな疑問を持った瞬間だったわけです。つまり、出世や世間的成

功か、あるいは自分の思いか、ということです。ここで4、5年悩みました。結局思ったのは人生は他人の物差しではなく自分の好きなように生きていいんじゃないか、ということです。で、移動遊園地屋となりました。



創業後

創業してからは、壁にぶつかってその度にはじかれる、という繰り返しでした。魅力ある市場というのは、すでに強力なプレーヤーがいるわけで新参者はまったく歯がたたないわけです。それで仕方なくとった戦法が、とにかく競争を避け、先行したプレーヤーがやりたがらない営業手法、市場、事業基盤で勝負するということです。

結果的にたどりついたのがショッピングセンターに特化した移動遊園地屋という業態で、いまでは年間150万人ほどの子供たちに楽しんでもらえるようになりました。

これからのこと

私は今幸せです。夢を共有できる仲間がいて、そして支えてくれる家族がいます。ベンチャー魂を忘れずにこれからもいろんな夢に挑戦していきたいと思います。どうぞ、これからもワックを応援してください。



受賞を祝い家族も駆け付けた

『蔵前特別賞』 授賞記念講演

「東京スカイツリー ～世界一への挑戦～」

株式会社日建設計 代表取締役社長 岡本慶一氏

はじめに

東京スカイツリーの設計にあたっては、大きく二つのテーマを持って臨みました。一つはクライアントから求められた「時空を超えたランドスケープの創造」と電波塔として或いは、新しい防災拠点としての「安心・安全」でした。

東京スカイツリー 「時空を超えたランドスケープの創造」

東京の東、隅田川の近くに建つ東京スカイツリー

ーは、2つの展望台を備えた、高さ634mの世界一高い自立式電波塔です。デジタル時代を支える新たなタワーの足元には、商業施設である「東京ソラマチ」、オフィス施設である「東京スカイツリーイーストタワー」がありそれらと共にひとつの街「東京スカイツリータウン」を形成しています。

設計にあたり、「時空を超えたランドスケープ



の創造」というのが、クライアントから私たちに求められた課題でした。数多くのスケッチを描き、模型をつくりながら、さまざまな可能性を追求しました。高さ600mを超えるタワーの設計は、イメージはもちろん重要ですが、それだけでは実現しません。確かなエンジニアリングが必要です。今から50年以上前に私たちの先輩が設計した東京タワーの時もそうでしたし、土木技師エッフェルが設計したエッフェル塔も同様です。

タワーは、足元のスタンス幅が長いほど、構造上、有利です。そこで、足元の平面形状を三角形とすることにより、この敷地の中でタワーのスタンス幅を最大化しました。一方、展望台のある上層部では円形平面が望ましいため、足元から上部に向かって平面が三角形から円形に徐々に変化していくというオリジナリティのある形態としました。この形態は、タワーを横から見た時、「そり」と「むくり」という日本の伝統的なシルエットを与えました。構造設計においては、日本の伝統建築・五重塔に構成が似た「心柱制振」という世界初の制振システムを開発しました。さまざまな最先端技術を用いながらも、日本の伝統文化の精神を受け継ぐことで「時空を超えたランドスケープの創造」が実現できたと考えています。

「安全・安心」の実現 東京スカイツリーの構造設計

1923年の関東大震災と同様の地震（M7.9）や東海地震（M8.0）などが生じた場合でも、ほぼ無損傷となる耐震性を有しています。風については、2000年に1度の強風（高さ634mの平均風速83m/s、最大瞬間風速約110m/s）にも倒壊しないレベルです。

タワーの揺れを抑えるために「心柱制振」とい

う世界初の制振システムを用いています。これはタワー中央部に配置した直径約8mの鉄筋コンクリート造円筒＝心柱とその外側の塔体とを構造的に切り離し別々の挙動をさせることで、心柱と塔体の揺れの周期の違いによってタワー全体の揺れを相殺するものです。心柱という名称は、日本の伝統建築であり地震による倒壊例がほとんどない五重塔にある心柱が、周囲の架構から切り離されている、形態の類似に由来しています。心柱制振により、地震時の揺れは最大50%、強風時の揺れは最大30%低減することが可能です。



『蔵前特別賞』授賞記念講演

原鉄道模型博物館 館長 原 信太郎氏（副館長であるご子息の原 健人氏が、代理で講演）

はじめに

私の父は、世界一とも言われる量の鉄道模型コレクションを誇る、原鉄道模型博物館の館長です。尊敬する父の母校で講演が出来、息子として大変誇りに思います。

父は93歳ですが、まだ模型を100台作りたいと言っています。いままで多くの言語を独学で学び、何にでも興味を持つ進取の精神の持ち主であり、息子である自分よりもまだ若く感じられることが多々あります。

息子としては父の情熱を傾けてきたものを何

とか残したいと思っていますが、父自身としては、自分で作ったものを後世に残すことに執着はしていませんでした。しかし母からの助言で、この鉄道模型博物館ができることになりました。



父は、とにかく鉄道模型が好きな人で、周囲のひとに、鉄道模型を通じて技術の楽しさ・素晴らしさを教えてくれました。本当は本物の鉄道を作りたいと思っていたらしいのですが、大きさの問題でそれは無理なので模型にしたとのことでした。

戦後コクヨに入社後、様々な海外の最新技術を積極的に導入に注力しました。「若い人たちには色々な可能性がある、若者にその可能性を感じてもらうことが非常に大事なことである。」と日頃から申しています。

父は、鉄道のすべてが好きですが、とりわけその技術が大好きです。それは、時代時代の最先端のハイテク技術の粋を集めているからです。その鉄道技術を模型に再現しました。世界中の素晴らしい技術を持つ鉄道を勉強し、模型にしています(p40「ちょっと気になるミュウジウム」参照)。

最後に、DVD「技術は世界を一つにする」で、父の人生と原鉄道模型博物館をご紹介します。皆様ご清聴ありがとうございました。

DVD「技術は世界を一つにする」より

原信太郎は、1919年、第一次大戦直後の、好景気に沸く東京に生まれました。三歳から鉄道好きの記憶があります。4歳の時、関東大震災に遭遇しますが、その時縁側から落ちた時にも鉄道おもちゃを離しませんでした。

日本は産業革命を達成し、自国で船舶・車両などを作る技術も習得し、欧米列強に追いつかんと、進んでいる時期です。鉄道は、ほぼ現在の線路の形となり、黄金期を迎えていました。

信太郎は、近くの田町の操車場に足を運び、輸入模型を手にし、東京中の電車だけでなく、小学生ながら関西一人旅もしました。当時は、高速電車の開業が続き、特に関西の私鉄では、鉄道少年あこがれの新型電車が続々登場していたのです。

小学六年生の時、いよいよ本物の電車が欲しくなり、初めて模型を自分で作ります。修理中の家のトタン屋根をもらい、職人さんに窓をあけるためのタガネの使い方を習い、針金でパンタを作り…。そうやってできあがった電気機関車は、今も架線から集電して立派に走ります。

1930年～1940年、鉄道の目覚ましい進歩が続く一方で、恐慌と戦争が社会に影を落としていきます。中学生の信太郎が感じたのは模型作りの資材不足でした。また鉄道技術書を読み、独学で語学を学び、



原鉄道模型博物館 いちばんテツモパーク 写真提供／原鉄道模型博物館

短波受信機の制作なども行っていた信太郎には海外の動向が直接入り、日本の敗戦を予感します。しかし、戦争は深まるばかり、いよいよ厳しい時代となってきます。金属商社の家業も物資不足で難しくなり、家業を継ぐより技術者になることを夢見た信太郎は、1940年に慶應義塾大学から東京工業大学に入学します。

当時見た映画「失われた地平線」の舞台、シャングリ・ラは、国境がない平和な理想郷。この名前を自分の模型につけて「シャングリ・ラ鉄道」としました。しかし早期卒業とともに徴兵。千葉の野戦砲兵隊に。ここで、東工大同級生の兄上という軍医に命を助けられます。除隊後、傷痍軍人として袋井に疎開して終戦を迎えます。

平和な時代を迎え、信太郎の技術力と語学力を生かす舞台の幕が開けました。株式会社コクヨで、技術担当重役として、様々な海外技術を導入し、さらに新たな技術を開発。そこにも鉄道模型で培った技術が生かされていました。全自動倉庫は、当時世界初の試みで、駅での鉄道制御方式と、レールによる物資移動という斬新なもの。数々の新しい技術は同社の飛躍的な発展に寄与しました。

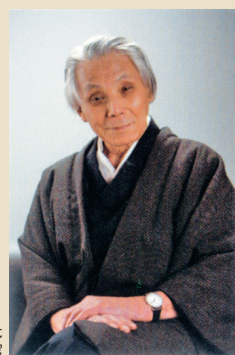
また、世界の鉄道に乗り、鉄道技術を吸収し、自作の模型に再現していきました。これまで訪れた国、延べ約380ヶ国、所蔵模型数約6000両、撮影したスチール約10万枚、フィルム約440時間。鉄道書籍・

関連コレクション多数。世界で鉄道模型界のカリスマとして知られていきます。

そして1991年に引退後は、自身の個人資産をもとに「財団法人原総合知的通信システム基金」を設立。多くの若い研究者を助成しています。鉄道への情熱は尽きることなく、自宅に作った「シャングリ・ラ博物館」では、鉄のレールの上を鉄の車輪で、架線から集電し、本物と同じ構造の台車で、模型が轟音を立てて走っています。

2012年、このうちの約3分の一を横浜の「原鉄道模型博物館」に移設し、一般公開。ここでは、信太郎氏の精巧な模型だけでなく、技術の楽しさ、素晴らしさ、信太郎氏の生き方をも伝えるものとして、今日も多くの人々が来館しています。

「技術は世界を一つにする」 by 原 信太郎



原信太郎氏
写真提供／原鉄道模型博物館

感想

タクトシステムズ滝沢様の講演は、本物のソフトハウスを創るという理想をめざして、独立系ソフトハウスを創業され、技術革新の激しいIT産業界にあっても、常にチャレンジ精神を忘れずに、経営に真摯に取り組んでこられた企業人の心意気が判る有益な話でした。

ワック栗橋様の講演は、商社マンから転身され、商業施設向けキッズイベントの企画・運営の分野で、独創的な企画力を活かして事業展開され、ベンチャー精神を忘れず、いろんな夢に今後も挑戦し続けたいという熱気が伝わる、素晴らしいお話でした。

日建設計岡本社長の講演は、世界的にも有名となった東京スカイツリーの設計、技術を判りやす

く丁寧に説明いただき、日本の建築技術のレベルの高さを改めて感じました。

原鉄道模型博物館副館長原健人様の講演は、原信太郎氏の鉄道模型にかける情熱、本物の技術へのこだわり、原鉄道模型博物館そのものの素晴らしさを、映像と音声を駆使して懇切丁寧に説明され、大変充実した内容のお話でした。

その後の交流会は、講演者を中心にして大盛況でしたが、今回は学生の参加者が多く、学生と先輩達との間でも活発な交流がされました。蔵前ベンチャー賞、特別賞が今後もベンチャーや企業の革新、活性化にお役に立てばと願っております。

蔵前ベンチャー相談室コーディネーター

豊田順一（S48修制）記